（別紙　2）

審査の結果の要旨

氏名　　王　翠玲

中国仏教者として五代十国一宋初を生きた永明延寿（904-975）は、一方において禅宗の一派である法眼宗の第三祖とされ、他方、浄土宗の祖師の一人に列せられる。また思想史上は、一般に「教家」と「禅家」との二つの流れの調和・統合を目指す教禅一致論の改革者と見なされている。これらの位置づけは、いずれも間違ってはいない。しかし、従来の諸研究においては、精密な文献学的・歴史学的検証に基づいて、延寿その人がいかなる時代的・社会的状況の中で生き、何を求め、どのようにして自らの思想を形成していったのかを着実に解明していく努力が不足していた。そのために、そうした個別の位置づけの間の関係が不明瞭であり、また、それらがもつ意味も十分には究明されてこなかった。著者は、このことが包含する問題点の大きさに注目し、主にかれの主著『宗鏡録』の解読・分析を通じて、延寿の実像を浮き彫りにするための基礎作業を遂行したものである。

本論文は、第一篇「伝記の研究」、第二篇「著作について」、第三篇「延寿の思想一『宗鏡録』を中心として」から成る。第一篇においては、数十種に上る延寿の伝記関係資料が手際よく整理されている。とくに、かれを育んだ呉越国の仏教に関する究明は高く評価されよう。第二篇は、延寿の著述とされる約80部の典籍のうち、現存する22部のものについて、それらの真偽、年代、特徴、流布状況等を調査・検討したものである。解明の方法や程度に若干のばらつきがあることが惜しまれるとはいえ、延寿の著述に関する最初の本格的な論考である。第三篇においては、『宗鏡録』の構成、題名等が詳細に検討され、ついで、儒仏道の三教に対する見方、懺悔観、禅宗観、「心」の思想が採り上げられ、考察される。いずれも重要かつ興味深い問題であり、それらに関わる基本概念の中国古典における用法を広範に調査して踏まえるなど、解明の態度は真摯で好感がもてる。問題の掘り下げが不十分なところも見受けられるが、随所に新たな知見も呈示されている。

以上のように、本論文は、一つの時代の転換期に立つ仏教者永明延寿とその中心思想を実証的に歴史の中に位置づけようとした労作であり、この意欲的な試みに一応成功している。むろん、延寿の思想の全貌を明らかにするためには、残された課題は少なくない。例えば、著者が強い関心をもつ実践の問題としても、延寿における機根論や成仏論、あるいは密教的儀礼の意義などの更なる追求は、必須であろう。全般的に詳細に過ぎる注釈部分の整理も必要である。しかし、本論文の成果は、仏教学、宗教学、ないし中国思想史学に対する貴重な貢献であり、本審査委員会は、充分に博士（文学）の学位に相当すると認めるものである。